

健康妄語録 ALS患者と家族を巡る悲劇の連鎖

ALS(筋萎縮性側索硬化症)患者の問題については、以前に安楽死を望む照川貞喜さんのケースを書きましたが(雲の手通信2009年4月、第56号)、今回はいわゆる相模原事件というものについて考えてみました。

相模原事件の発端は、2004年8月に起きた囑託殺人にあります。当時ALSの症状がどんどん悪化して、わずかに文字盤を目で追うことによってしか意思を伝えることが出来なくなってしまった、自宅介護の長男(当時40歳)のたつての懇請により、母親の菅野初子さんが人工呼吸器の電源を切り、長男を窒息死させたというものです。長男は呼吸器を止められる際も文字盤を目で追って「おふくろ、ごめん。ありがとう」と伝えたとされています。直後、母親は自分も手首を切って後追い心中を図ったのですが死に切れずに逮捕されて、結局囑託殺人罪で懲役3年、執行猶予5年の判決を受けたというのが、第一の事件でした。

その後、初子さんは自分が死に切れなかったことに対する自責の念から強度の鬱病にかかり、今度は夫の幸信さんにたいして「死にたい」あるいは「殺してくれ」と訴えるようになりました。二人で心中を図ったこともあったのですが、死に切れず、ついには自分で首を刺して自殺を図る初子さんを見るに見かねて、幸信さんがあらためて包丁で刺して殺害して警察署に自首した、というのが2009年10月に起きた第二の事件です。残された初子さんの遺書には「息子と一緒に楽しく暮らします。これでやっと楽になれます」と書かれてあったそうです。夫の幸信さんは、自分は残って事情を説明し、また責任を負わねばならないので死なずに自首したと陳述しているそうです。

現在その第二の事件の裁判が始まったということですが、第一の事件に連鎖して起きたこの囑託殺人事件はどのように裁かれるのでしょうか。

ALS患者は全国で7000人近くいるといわれていますが、その8割は自宅介護だそうです。社会的な支援体制の不備という問題も大きなファクターとも思えます。いずれにせよ、生きるということ、また死ぬということ、そして尊厳死や安楽死の是非、自殺幫助ということなどなど、たいへん複雑で重く悩ましい課題をわれわれに提起してくれている事件です。

左顧右眄～さこ・うべん～(35)【第4話 気と気功をどう理解するのか】

18) 外気功

一般的には、内気功に比べて外気功はさらに何か胡散臭いものとして思われがちです。何が放射されているのか、そしてそれがなぜ第三者にたいして有効な力、効用を持つものなのかというところが極めてわかりにくいからです。

しかし、中国でも日本やその他の国でも、「気」の科学的な追及や実験、検証はさまざまな形で積み上げられてきています。たとえば、熟達した気功師が治療や麻酔のために患者に対して、掌の労宮のつぼ(心包経)から気を照射する場合、これが主として遠赤外線であることはすでに確認されている事実です。(人間はじめ動物はすべて一種の生体電気を発して内部の情報伝達的手段として用いているのですから、これは当然ありうることなのです。)患者は照射されているつぼ(経穴)に反応がでること、ならびに、患者の脳波が同調することなどが同様に確認されています。ご承知のように、現在の

中国では気の照射による麻酔行為と、各種の治療行為は一般化しているものです。日本では法的な制約もあってなかなかそこまでは進んでいないようですが、インターネットではさまざまな事例が報告されています。

外気功については私自身も5年ほど前ですが、ある教室に通って勉強しました。自然体で目をつぶって立っている背後で、先生が掌から気を照射しつつゆっくり回すと、体が自然に反応してくるくる廻りだすようになります。不思議ですが、ほとんどの人がそうなります。先生はこれ以外に医療気功的な施術を各受講者の症状にあわせて行います。体の不調を治してもらおうとそれを目当てにずーと通っている人も多いようでした。この教室では他にもいろいろな種類の気功法の学習や実践もあって、これもとても勉強になりました。私は2年ほどで止めたのですが、その理由は私自身は外気功による施術を受ける健康上の必要性がとくになかったからです。しかし、このときの経験で気が照射されることを実感することが出来たことはひとつの収穫でした。

また、私にとっては、自分自身で自分の健康を維持、改善する「内気功」こそ基本であるということ、そしてそのためにはいままでどおり太極拳を続けてゆくことが大切なことなのだというを再確認出来たことがそれ以上の大きな収穫であったと言えます。つまり楊名時健康気功太極拳の、「立禅、甩手、八段錦、二十四式太極拳」という基本プログラムこそ、そして出来る限り毎日それを実践することこそが、私にとっての最適な「内気功」であるということです。

最後に、外気功の一部に位置付けられている「武術気功」について触れなければならないのですが、私自身は正直なところこれについての体験はもちろん、十分な知見がありませんので、ご満足いただける説明は出来ません。しかし、基本的に言えば、上述したように、気はエネルギーとして第三者に放射されることは明らかですし、現に医療気功としては実用されているものです。したがっていろいろな書籍などにある、“空気投げ（相手には触れることなく倒す技）や、“発勁”と呼ばれる中国武術特有の技法、また経絡理論に基づく急所打ちの“点穴（打穴）”の技法、などにはたいへん興味を惹かれます。ここで詳述することはいたしませんので、ご興味のある方はぜひその類の本を読んでみてください。とりあえずは「中国武術の本」（学研）、あるいはこの本を監修し、また実技者としても登場している松田隆智氏の拳遊記、続拳遊記（BAB ジャパン）などからお読みになってはいかがでしょうか。

旅をうたい拳を詠む NHK大会入選歌

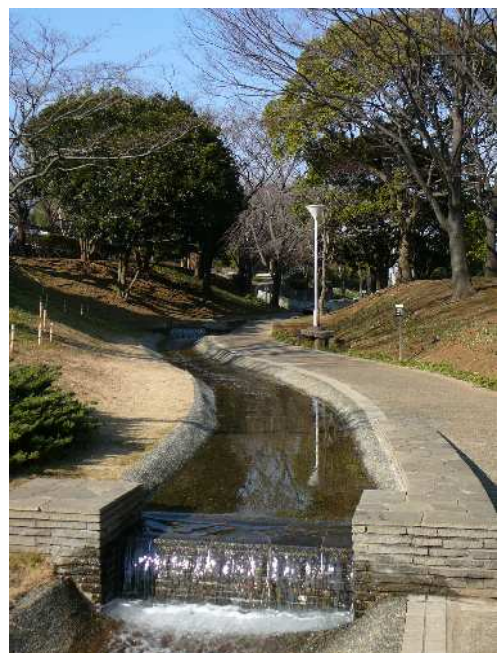
平成21年度のNHK短歌大会へ応募していたところ、下記の3首が入選しました。またこの中の1首が栗木京子先生の選によって秀作に選ばれましたが、残念ながら特選には届かず1月23日に開催された大会への出場は叶いませんでした。

秀作 せせらぎもよどみも滝もあるからに
人工水路にセキレイ遊ぶ（栗木京子先生選）

入選 大輪の菊にも勝る華やぎを
ミクロに咲かすカントウタンポポ

入選 散歩路に拾ひしどんぐりつやつやと
秋の光を机上に放つ

栗木京子先生には平成20年7月、鎌倉の瑞泉寺で行われた吉野秀雄艸心忌において、主催者の中野完二先生のお引き合わせでご挨拶させていただいたことがあります。これも何かのご縁ということでしょうか。とても嬉しく思っております。



【新長島川親水公園・江戸川区】